



第 51 回 「手づくりのアジール」の言葉

青木真兵「手づくりのアジール」（晶文社、2021年11月）は関西の都市から奈良県の山村に移住し自宅に図書館を開いた著者の活動を紹介しています。なお表題の「アジール」（Asyl）はドイツ語で、「不可侵」を意味するギリシャ語 *asylos-asylon* に由来するそうです。これは中世ヨーロッパに多数あった統治能力から逃れて自由になれる場のことで、国家権力や警察権力や商売の取り立てなどが及ばない場所だそうです。本書は関連する研究者等との対談の内容も紹介しており優れた書籍です。記載内容は人文系に限られていますが、理系にも共通する貴重な論点が多くありますので、本稿ではそれを紹介しましょう。

第一に著者はこの世の中には「此岸」と「彼岸」があることを指摘しています。「此岸」は経済、業績などといった当代の支配的な市場原理、都市原理を優先する社会を意味しています。それに対し「彼岸」はそれらの原理が働かない社会です。此岸の社会は「明晰さ」の上に成り立ちますが儂いものなので、社会には内部と外部があることに気づき、さらに人間は社会の内部しか理解することができないと認めることが大切なのだそうです。この内部と外部の対応はオフシエル科学が扱うマイクロとマクロの対比、さらにはオンシエルとオフシエルとの対比に似ていますね。さらに著者は合理的につくられた「此岸」の社会の外部への回路を組み込んだ上で、世の中を「なんとなく」構想する必要があると主張しています。

第二に「逃げる」ことについて触れています。これは一見後ろ向きの行動に見えますが、著者はこれを外部への回路を組み込むための主体的行動として捉えています。なお、この「逃げる」は「出家」とは違うそうです（「出家」は戻らないことを前提としているので）。私自身30年ほど前に「日本でも重力波検出のための光学的方法の研究を始めるのでそのプロジェクトに参加せよ。」と言われたことがあります。ただしこれは欧米の後追いにすぎず、その研究実施構想のオリジナリティに疑問を持ったので断ったところ、「逃げた」と言われました。「断った」のは後追いの研究に対して「否」を突きつけた主体的行動だったのですが、研究の構想を立てるにあたり「何をやるか」、ではなく「何をやらないか」を考えることの方が重要ですね。

第三に、単に「逃げる」のではなく二つの原理を往復することが重要であると述べています。いわばこの場合の「逃げる」は「家出」の類型でしょうか。この往復の結果、自由を手に入れることができるのだそうです。私自身が大学で働いていたとき、学内での研究は雑事の多さ、研究費の少なさのためなかなか進まずイライラが続きましたが、幸いにも KAST, ERATO という公的な個人研究の大型プロジェクトが私に家出の機会を与えてくれました。しかし研究費については恵まれたものの、雑事の多さは相変わらずでした（かえって増えたかな？）。定年後、オフシエル科学の基礎理論研究のために（一般社団法人）ドレスト光子研究起点（RODreP）を設立してようやく問題が解決しました。定年により結果的に「出家」したことになりますが、オフシエル科学の研究を通じてオンシエル科学の研究にも付き合うことから、上記の「家出」の様相が今も残っています。なお、両者の研究にも付き合い続けるということはオフシエル科学がオンシエル科学の限界、「有限性」を補完しているからです。

第四に、このような「有限性」をベースに二つの原理を往復することによって自由を得ることを著者は「土着」と呼び、土着した人たちが担う民主的な社会を「山村デモクラシー」と呼んでいます。私の場合にはオンシエル科学の有限性をベースに、オフシエル科学とオンシエル科学の二つの原理を往復することによって自由を得ることになりましょうか。

最後に「逃げる」、「孤岸と彼岸と往復」、「土着」により研究の自由を手に入れることができる理由として、著者の指摘を列挙し、対応する私の理系研究の事情を記しましょう。

- ・著者は「労働」(labor)を生命・生活を維持するために行う営み、「仕事」(work)を家や机のように長きにわたって使うものを作ることとして対比しています。理系では応用研究は対価を支払う都市原理に基づくので「労働」です。一方、基礎研究では市場原理は働きません。オフシエル科学のような基礎研究の成果は後年になって気づかれるものなので「仕事」に近く、それでこそ創造性、独創性を発揮することができるのです。

- ・著者は山村に移住後、短期間のうちに図書館を開設することができた理由として、その完成形をイメージしていなかったことをあげています。また著者らはこの図書館を「人文知の拠点」としていますが、特に新しいことをやろうとしたわけではなく、それまでやってきたことを組み合わせただけであり、「拠点」というのは大それているものの、山村で自宅を開いて小さくやるぶんには文句を言う人はいないだろうと述べています。私の場合にも幸いなことに RODreP を短期間のうちに立ち上げられたのは、漠然とした構想のみがあり、完成形をイメージしなかったからでしょう。考えるより一歩踏み出すことが大事ですね。また「研究起点」とはいつでも、それまでやって来た研究のうち積み残したものをとりあげているのに他ならないのです。「起点」というのは大それているものの、大学の外で一般社団法人としてやるぶんにはよいでしょう。

- ・著者は「拠点は建物である必要はない。」と指摘しています。火事にあっても、外敵が入ってきても絶対に譲れない、守りたいものを納めておくが拠点だそうです。拠点の重要な特徴の一つに人と人が出会うという機能があり、この場合むしろ中心不在の組織が理想であると述べています。オンシエル科学の「有限性」という致命的な問題を解決するためにオフシエル科学は避けて通れない科学です。その活動の際、「研究起点」に人が集まることがあるので RODreP は拠点を兼ねていますが、建物ではありません。RODreP には会議場がありませんが、オンライン会議システムを使って頻繁に研究者が出会っています。これは昨今のコロナ禍ではかえってうまく機能しています。すなわち RODreP は研究「センター」という唯我独尊的な組織ではありません。すなわち研究の原点、起点であり人と人が出会う機能をもたせてはいますが、世界各地の人が集まるハブとしての拠点ではありません。